

“清原の涙”を考える

教養部助教授 梶川 信行

昭和60年秋のプロ野球ドラフト会議のことは、覚えている人も多いのではなかろうか。圧倒的な強さを見せつけて甲子園を沸かせた、あのPL学園の強打者清原と好投手桑田のプロ入りをめぐる事件、のことである。

もちろん、その年のドラフト会議の目玉は、清原と桑田であった。彼らをいったいくつの球団が指名するのか、そしてどの球団が交渉権を獲得するかということが注目を集めていたのだ。清原は早くからプロ入りを表明し、「できれば小さい頃から憧れていた巨人でプレーしたい。」と言っていたのに対して、桑田の態度はなぜかかたくなだった。「僕は進学するつもりなので、指名しないでほしい。指名されても絶対にプロへは行きません。」と公言していたのである。実際、そのドラフト会議と日程の重なっていた早稲田大学の推薦入試を受けるというフレコミで、桑田は会議の直前に上京して見せたものだった。

ところがいざ蓋を開けてみると、巨人が指名したのは、その桑田であった。しかも、桑田は早稲田の推薦入試を受けずに、早々と巨人入りを表明したのである。おそらく、他球団との競合を避けるために巨人が打った大芝居、だったのだろう。巨人のアン・フェアなやり方に批判が集中したのもだった。

一方、清原との交渉権は西武ライオンズが獲得したが、彼は茫然自失といった表情で、報道陣の前で大粒の涙を流していた。親友と思っていた桑田の裏切り、戦力の均等化という大義名分のために、場合によっては個人の意思を踏みにじるドラフトという残酷な制度に対する割り切れない思い……、彼の涙にはさまざまな感情が込められていたに違いない。

だが、そういういきさつで入団したにも関わらず、今の清原は西武ライオンズという球団に入ったことを、むしろ幸運だと思っているのではあるまいか。彼は1年目から順風万帆であった。いきなりレギュラー・ポジションを与えられ、やがては実力で4番打者となったばかりでなく、彼の打棒はチームを優勝に導き、文句なしの新人王に輝いたのである。さらにチームの日本一に2年続けて貢献し、給料も大幅にアップした。実績のあるベテランや中堅選手でポジションのふさがっていた巨人では、きっとこうは行かなかつたろう。

もちろん、巨人は過去に（あえて強調するが、それは過去のことに過ぎない）輝かしい実績があり、長島、王といった傑出した選手を多く輩出して来た。マスコミの報道なども巨人中心と言ってよいだろうから、プロとして同じ野球をやるならば、やはり巨人の選手として多くの人に注目された方がいいに違いない。

巨人がV9を達成した昭和48年までは、確かに巨人は圧倒的な強さと人気を誇っていた。昭和25年にセ・パ両リーグに分かれてからの24年間で、何と19回もリーグ優勝を果たしているばかりでなく、そのうちの15回は日本シリーズでも優勝しているのである。

だが、昭和40年にはドラフト制度も始まり、その効果が十分に浸透してからのプロ野球は、もはや巨人一辺倒の時代ではなくなった。昭和49年以後のセ・リーグの優勝は、巨人と広島が各5回、中日2回、阪神とヤクルト各1回というように、少なくとも巨人だけが強い時代はもう終わったと言ってよいだろう。

そういう意味で、昭和49年は大きな転換期

となった年だが、その年にはあの長島が引退したばかりでなく、日本が第一次オイル・ショックに襲われた年でもあった。高度成長の夢から醒めることを余儀なくされたその年に、高度成長時代の衆衆の夢でもあった「常勝巨人」と言う神話も、長島引退とともに崩壊したのである。

「常勝巨人」のシンボル長島は、まさに高度成長期の国民的英雄でもあった。もちろん、こどもたちのかぶる野球帽も、YGマーク一辺倒であった。しかし、日本人全体が高度成長というひとつの夢を追い続けられた時代はもう過去のことに過ぎない。お子様ランチとともに、ラーメンもカレーライスもカツどんも、いっしょくたに並んでいるデパートのお好み食堂の時代から、各人の好みに応じた専門店街の時代になった。一人で時代を背負えるようなヒーローは、もはや出現し得ない時代なのである。

それにも関わらず巨人の関係者は、あいも変わらず「常勝巨人」という過去の幻を追いかけている。いや、巨人の関係者ばかりでなく、多くの巨人ファンも高度成長期の夢を追い続けている。あい変わらず根強い長島待望論や一茂フィーバーは、人々のそうしたノスタルジアに過ぎないのではなからうか。

巨人に指名されなかった清原が、報道陣の前で「涙」を流したのは、ひとつには彼にこうした現実が見えていなかったからではなからうか。少なくとも、「清原の涙」は巨人と西武という二つのチームに対する公平な知識に基づいて流されたものではあるまい。

万年ピリ争いで、給与水準も12球団最低の南海（新聞等に公表されたプロ野球選手会の調査による）に指名されたならいざ知らず、今や西武ライオンズは実力、給与ともに12球団中ダントツである。都心から離れた所沢をフランチャイズとするハンデにも関わらず、観客の動員数もセ・リーグの球団に引けを取らない。

清原の成績と年俸を見てみよう。打者としてあらゆる新人の記録を塗り替え、新人王を獲得した1年目の契約更改で、年俸が480万円から2200万円に急上昇したのは当然だが、2年目の清原は打率2割5分9厘と低迷した。それでも西武は彼の年俸を3000万円にアップしたのである。

打率は低かったものの四死球による出塁が大幅に増えたことで、出塁数は183から205へ、かえって増加している。おそらくそれは、チャンス・メーカーとしての貢献度を、球団がきちんと評価した結果であろう。監督の責任で優勝できなかったのに、契約更改の席上でその責任を選手に転嫁して、年俸を低く抑えようとする巨人とは大きく異なっている。

話を「清原の涙」にもどそう。彼の涙が桑田の裏切りに対する憤りや希望の球団に入れない失望などを原因とするものであることは確かだろうが、その一方で時代認識の欠如や西武という球団に対する無知が、その「涙」を助長したことも確かであろうと思われる。少なくとも、彼はドラフトという就職の関門を前にして、各球団の給与水準や経営体質について、まったく勉強していなかったと考えられる。内実を伴わないかも知れない過去のイメージだけが、彼の一生を左右するかも知れない判断の根拠だった。

清原の目を曇らせたものは、おそらく彼に与えられていた〈情報の片寄り〉だろう。企業の規模、経営体質といった点で、西武グループと読売グループとでは、どちらが優れているのかわたしは知らないが、少なくとも〈情報〉の送り手としては、読売グループの方が圧倒的に勝っている。何しろ読売は、新聞とテレビを持っているのだ。テレビの中継が巨人中心であるのも当然だが、わたしたちはこどもの頃から読売グループを中心に発信される一方的な〈プロ野球情報〉を大量に与え続けられて来た。それを無批判に受け入れ続けることにより形づくられたイメージが、「清原の涙、

の原因のひとつだったのである。

わたしが『清原の涙』から学生諸君に考えてほしいことは、一方的に与えられる〈情報〉を無批判に受け入れ続けることの危険性である。清原は結果的に幸運だったが、誰もが結果的に幸運であるという保障はどこにもない。少なくとも、その〈情報〉の送り手の立場をよくわきまえた上で、立場の異なる複数の〈情報〉から判断するの でなければ、わたしたちは偶然与えられた〈情報〉にふり回されてしまうだろう。〈情報の洪水〉とも言うべき現代社会においては、特にその危険性は高いのだ。

その点では、学生諸君が毎日教室で与えられる知識などもまったく同じである。それは多くの学説の中で、たまたまその教師が信ずるひとつの立場でしかない。もちろん、わたしの講義なども決してその例外ではない。むしろわたしなどは、〈常識〉と信じられていることを疑うことこそ〈学問〉であると考えているから、わたしの話は〈通説〉と異なることが多い。だが、それはひょっとしたら単なるわたしの誤解に過ぎないかも知れないのだ。

図書館は、そうしたひとつの立場から発信される〈情報〉を、多くの立場からの〈情報〉によって是正してくれる場所である。自ら探し求めれば、そこにはあらゆる立場からの〈情報〉がある。〈情報不足〉が原因と言える『清原の涙』は、マスコミに恰好の話題を提供したが、ごく普通の人間である君たちの『涙』は、いったいどのような意味を持つのだろうか。

